

クルト・ヴァイルの歌に思うこと

ユダヤ人であるクルト・ヴァイルはナチの政権を逃れ 1933 年にフランスに亡命し、その 2 年半後にはアメリカに渡り、50 歳の生涯を終えるまで、ニューヨークでミュージカルの音楽を中心に作曲活動を行いました。私はかなり前から彼のパリ亡命時代の中から何曲かを歌って来ました。それらの曲はノスタルジックで、心の中に埋められている哀しみや怒りや愛までもが呼び起こされるシャンソン。ヴァイルの歌が細かい霧のように、微笑みのように私に降り注ぎ、やがて私は彼の人生と作品にもっと近づきたいと思うようになりました。

ベルリンからパリ、ニューヨークへと移り行く土地は違っても、彼独自の感性と音楽の根に流れる“ヴァイルの言葉”は決して変わることなく、しかしそれぞれの土地の人々の音楽のスタイルを受け入れながら変貌して行く……

優しい歌。どんなに激しい歌だって優しい薄いそのエレガンスの膜で包み込む。美しい歌。決して強く押しつけることなくハーモニーの中で心をあやしてくれる。その歌は魂の溜息のように流れ出る……

奈良ゆみ